

<sup>67</sup>Gaの取り込みが高度にみられる。この場合、肺門、縦隔部への拡がりを検討するのに有力な情報を得られること、滲出液や無気肺中の病巣部を描記できる点に有用性があると考えられる。

3. 転移性腫瘍でも取り込みがあるが、この場合、ある程度の大きさをもつもの以外は検出不能であった。

4. 縦隔腫瘍では、単純X線像では明らかでない縦隔内での拡がりを明らかにすることができる。

### 7. 転移性肺癌の臨床

長崎大 緒方弘文・籠手田恒敏  
松本武典・吉村 康・中野正心  
原 耕平・箴島四郎

悪性腫瘍の肺転移について我々はすでに本学会総会において数回報告してきたが今回はさらに、症例を増し、その臨床像について検討を加えた。過去11年間当教室において剖検し得た186例の症例中93例(50.0%)に肺転移を認めた。原発臓器別では実数では肝が最も多かったが転移率では乳、腎、脾、肺、肝、胃の順であった。死亡前3週までの胸部X線像で有所見者は71例(76%)でそのX線分類では結節型、特に多発結節型が最も多く以下リンパ管炎型、肺炎型等を示した。これを肺を除いた原発臓器別にみると少数例のためか特異性は見出し難く胸部X線像から原発臓器の推定は困難であった。自覚症状では咳嗽、喀痰、背痛など

の呼吸器症状が1/4に認められた。喀痰の細胞診では原発性肺癌に比し低率であった。

### 8. 泌尿生殖器悪性腫瘍の肺転移

久留米大 重松 俊・林田健一郎  
山下和彦・河田栄人

泌尿生殖器悪性腫瘍患者剖検例65例について肺転移の頻度を調査した結果、いずれかの臓器に転移を認めたものが55例あり、転移率は84.6%であった。肺転移は、リンパ節について二番目に多く41.5%であった。原発臓器別にみると、腎腫瘍では肺転移が最多で71.4%、膀胱腫瘍ではリンパ節、肝について3番目で27.8%、前立腺腫瘍ではリンパ節、骨について3番目で40.0%、後腹膜腫瘍では脾、肝に次いで3番目で28.6%であるが、リンパ節、腸管も同率であった。その他、尿道腫瘍に3例中1例、睾丸腫瘍1例、副腎皮質腫瘍3例中2例に肺転移が認められた。肺における部位別は右下葉、左下葉にやや多い。次に、臨床例からレ線学的にみても、腎実質腫瘍57.1%、腎盂尿管腫瘍20.0%、膀胱腫瘍6.5%、前立腺腫瘍9.1%、睾丸腫瘍40.0%、後腹膜腫瘍50.0%に肺転移が認められた。

(質問) 長崎大 原 耕平

1) cannon ball型と撒布型の割合は。

2) 原発巣の処理は。

(答) 久留米大 林田健一郎

1) エックス線学的にみた転移型

は検討していない。

2) 単発例は30~40%に認められる。

3) 他臓器に転移がなく、肺転移のみのものは腎腫瘍に多い。

### 9. 転移性肺腫瘍の検討

久留米大 ○桑野建治・衛藤道生  
山崎一城・橋本憲三・武田仁良  
倉岡三郎・猪口壽三

肺に転移巣をきたした悪性腫瘍は、その予後が極めて悲観的なものであるという考えが強かった。しかし、近年、悪性腫瘍に対する診断および治療法の進歩に伴い、原発巣の根治術と共に、肺転移巣に対しても積極的に手術療法が試みられるようになって来た。その成績は、手術の適応を選べば、決して悲観的なものではないように思われる。

我々は、最近、3例の手術例を含め、11例の転移性肺腫瘍例を経験した。原発巣別にみても、悪性絨毛上皮腫、睾丸腫、腎癌といった泌尿生殖器が多く、さらに骨肉腫、肝癌、結腸癌などがあげられる。

そこで、我々はまた、本学病理剖検記録から転移性肺腫瘍の臓器別頻度、性、年齢、原発巣の組織型、肺転移発見までの期間、他臓器合併転移の頻度などについて調査した。これら転移性肺腫瘍に対し、十分検討をし、さらに二、三のOperabilityについて考察を加えたので報告する。